

【講評文】 8月9日（火） 5校目

「ミッション5ミニッツ 完全版」 岐阜第一高校

映画「ミッション：8ミニッツ」の設定（タイムループ）を応用し、2020年に流行が始まった新型コロナのもたらした混乱を、教室を舞台にコメディとして表現した作品でした。序盤から中盤に（というかほぼ全編）強烈なコメディをふんだんに盛り込むことで観客を爆笑の渦に巻き込み意識をおおいに惹きつけ、ラストのシリアスな展開に持ち込むことで心を鷲掴みにしたまま伝えたいことの表現がなされた素晴らしい作品でした。

キャストは発声や動きなど基礎的な部分が確立しており、台詞が聞き取りやすくストレスなく見入ることができました。幕開け最初の一言から最後まで全力で演じ切ることでは会場も安心して笑いきることができ、その後も立て続けに繰り出されるネタの数々にその場の空気は完全につかまれていたように思います。

照明はホリゾントを緑に染めていたことで、空の色としては不自然だという意見も出ましたが、むしろこの不思議な世界観を表現するに際しては、黒板の緑とも合わされた奇妙に調和のとれた配色で、照明担当者のナイスセンスが窺い知れるものとなっていました。音響はSEをあえて使わず、役者の口から発せられる擬音形容がしがたいあの時間移動音は、繰り返し聞くことでシュールな雰囲気醸し出し、期待通りの展開に笑わずにはいられない空気を生みました。逆にBGMは思い切って音を出しながらも役者の声は負けておらず、雑で全力な歌声のオチに全員倒れるという展開に会場全体で爆笑が起こりました。衣装や小道具にも細かいこだわりを感じ、一見荒削りのようであるキャラクターの識別や場所や雰囲気の特定に繊細な配慮がされていたことで、違和感や混乱なく純粹にストーリーと笑いに入り込むことができました。

現在なお流行が終わらないコロナを題材に、どの世代にも共感できる場面が多くありました。感覚が自身とも重なるからこそ共感を呼び、不安定な世の中を笑い飛ばそうという姿に活力をもらいました。伝えたいメッセージをネタを交えた直球で伝える岐阜第一さんのスタンスは、なかなかまねのできない芸当だと改めて思いました。

また、これは本来言及すべきではないのですが、今回は女性役の男性が代役での登板となっていました。台本を手にしての登場は一見不安を与えそうなものですが、最初を含め要点を抑えた見事な代打にコメディ要素を壊すどころか大きなインパクトさえ与えることができていました。故上島竜平さんへの追悼ネタも、まだまだ生き続けますね。

岐阜第一高校のみなさん、上演お疲れさまでした。

（文責 加納高校1年 ヨル）